新聞配布を通して、
皆さんとお茶っこさせてもらって、
あったかい東北の皆さんが好きになって、
神奈川から女川町に移住しました！
これからも皆さんと一緒に、
東北の地で歩んでいきたいです。

きずな新聞　ひで（女川）

あの日から10年が経ちます。
決して過去のことではありません。
避難所での明るく気丈に振舞う皆様の姿が
目に焼き付いて離れません。
終わったことではなくまだ続いています。
僕は忘れません。決してわすれません。
一人じゃないです。がんばろう。

裾野赤十字病院　野田

2019年秋、
新聞配りに参加したときに復興住宅の
住民さんから頂いた弁慶草の苗、
去年も今年も綺麗な花が咲きました。
頂くとき丁寧に丁寧に包装してくださり、
その気持ちを忘れずに、大切に大切に
育てています。皆さんの未来にも、
大きな花が咲きますように。

きずな新聞　小川（千葉）

発災から約2か月後、
石巻市内の小学校で活動しました。
石巻の方々との関わりを通して、
人と人とのつながりが持つ力を感じました。
活動中に地域の方にいただいた未ぎが
とても美味しかったことを覚えています。
コロナ禍の中、微力ながら
私が出来ることを続けていきます。

大分赤十字病院　N

「きずな新聞、お届けに来ました！」
ドアをノックするのはドキドキでした。
「何処から来たの？」「愛知から来ました」
「遠くからありがとう」この会話をして
頂いただけで、本当に嬉しかったです。
最初は「ボランティア」でしたが、
今は「石巻大好き人」です。
また遊びに行きます。

きずな新聞　キモサベ（愛知）

本社からバスで石巻赤十字病院に向かい、
医療支援第5班として活動しました。
患者様は大変な状況の中でも
辛抱強さをもたれていて、
「遠いところからありがとう」と
声をかけていただき、私自身もとても
励まされたことを思い出します。
どうぞお体ご自愛下さい。

日赤広島看護大学　中信利恵子

発災まもなく出動、
12時間かけて辿り着いた先は石巻だった。
救護所を開設すると不安な表情は
安堵へと変わった。満足な医療の提供など
出来ないが、みんなに寄り添いたい気持ちで
一杯だった。無邪気に手を振る子供たち、
ヘリから見た夕日が
また明日が来ることを教えてくれた。

足利赤十字病院　高橋 孝行

発災後2日かけて救急車を運転し、
石巻赤十字病院に向かいました。
試行錯誤しながら活動を行う中、
変わり果てた風景を目の当たりにし、
今までの価値観がガラッと変わったことを
今でも覚えています。
住民の方の励ましの言葉を
大切にこれからも行動していきます。

日赤長崎原爆諫早病院　神之田和久

雄勝町での巡回診療活動中に出会った、
明るい笑顔の元気な女子高生。
行方不明の母親を、
祖母と二人で待ち続けていました。
あれから10年…
きっと素敵な女性になっているだろうなぁ…
と時々思い出しては、
今でもその笑顔に励まされています。

日赤宮崎県支部　森田マヤ

当時はお子さんを中心に
関わらせていただきました。
10年たったからもう高校生でしょうね。
きっと地域を支える頼もしい力に
なっているんだろうな、と子ども達の顔を
思い出しています。コロナでまだまだ
落ち着かない日が続いていますが
健康第一でお過ごしください。

日赤医療センター　永安

蛇田中学校に設置された救護所で活動した。
自宅の片づけから夕方に戻ってきた方が
受診することも多く、昼夜問わず交代で
診療したが、何か役にたちたいと
2～3時間の睡眠でも苦には
ならなかったことを覚えている。
あの日の皆さんが少しでも
笑っていてくれることを願っています。

成田赤十字病院　杉森啓一

震災が起きた年の
3月31日に娘が産まれました。
その娘ももう少しで10歳。
当時、石巻市の湊小学校で
一緒に活動した私は、
あの時の想いを胸に
皆さんと共に生きています！

沖縄赤十字病院　比嘉良民

震災直後に、
血液を医療機関に届けるために派遣されました。
日々のガソリンさえ給油するのが大変な状況で、
無事に業務が出来たのも、
被災地の方々の目に見えない温かい支えが
あったからです。
先が見えないコロナ禍ですが、
体に気を付けてお過ごしください。

京都府赤十字血液センター　豊國康志

もう10年になるんですね。
新型コロナのため、
石巻とは1年間ご無沙汰してしまいましたが、
また会いにいきますね。
時間が経っても悲しいお気持ちは
変わらないと思いますが、
少しでも元気出してもらえると嬉しいです。
新聞配りにいったらお話しましょう。

きずな新聞　佐藤俊一／しゅん（東京都）

10年間、
たくさんの涙と笑顔を皆さんと共有しました。
直接お会いした方、
紙面を通して出会ってくださった方、
すべての出会いに感謝です。
11年目のこれからも、共に歩んでいきましょう。
あの日を生き抜き、
そして今日まで生きててくれて、ありがとう。

きずな新聞　岩元暁子／あき（東京／石巻）